～自信と誇りに満ちた指中生～　　令和4年11月1日（火）　第7号

指扇中だより

～WE LOVE SASHIOGI！～

〒331-0078　さいたま市西区西大宮３－31－１　TEL 048(624)6234　FAX 048(624)2479

『優しい赤』

校　長　　大河内（おおこうち）　範一（のりかず）

大学生になってすぐに高級中華料理店でアルバイトを始めた。店員の制服は全員チャイナ服という本格派だ。勤務日には、途中で「まかない（食事）」が出たのだが、とにかくこれが楽しみだった。餃子や春巻、麻婆豆腐など、店で提供されるものとほぼ同じ料理が次々に食卓に並び、食べ盛りの若者には幸せな時間であった。

ある日のこと、私は昼からの勤務だったのだが、何も考えずに「赤い靴下」を履いて出勤した。格式のある店なので、店員の足元から派手な色がちらちらと見えるのはいいはずがないのだが、何故か無神経に履いていってしまった。

その店の副店長は、てきぱきと仕事をこなす凛々しい女性だった。副店長は私の靴下を見るやいなや、スッと店を抜け出して近くのコンビニに行き、黒い靴下を購入してきたそうなのだが、もちろんそれは後から知ったことだった。

副店長は私を呼び止め、私の目をジッと見つめながら、黒い靴下を差し出して「これに履き換えてきて」と穏やかだが毅然とした口調で一言だけ言った。きつく叱責された訳ではないのだが、私はその眼差しと雰囲気により、一瞬で全てを理解した。状況判断があまりにも不足していた自分の愚かな行動を恥じた。

ただ、私の未熟な行いにもかかわらず、副店長の適切な対応のおかげで、人間関係が崩れることもなく、何事もなかったかのようにアルバイトを継続することができた。私は感謝の気持ちを込めて、今まで以上に一生懸命働こうと決意した。

このように、人と人とが関係を上手く築いていくためには、注意する側と注意される側の双方が高い意識を持たないと成立しない。注意する側は、相手に思いやりの気持ちを持って穏やかにメッセージを伝えること、また、注意される側は、相手の厳しさや優しさとは関係なく、指摘されたことを真摯に受け止めて素直に改善しようとすることが大切である。大きな声や怒鳴り声に頼らずに意思疎通ができる世の中が、そして戦いのない平和な世界が広がってくれることを強く願う。

接客が少なかった日に副店長と雑談をする機会があった。「大河内くんは本当に働き者ね。将来、私の娘をお嫁さんにしてもらおうかな。まだ小学生なんだけどね。」と言ってクスクスと笑った。単なる大人のジョークだったのだが、その時の私は気の利いた返答もできず、どぎまぎしながら一緒に微笑んだ記憶がある。

その後まもなく副店長は人事異動で店を去り、再び会うことはなかったのだが、中華料理店のまかないの味と、副店長の優しい笑顔は、今でも忘れられない。